



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

誰にでもできる「布施」 貪らない心

浄土真宗本願寺派の2月は「ダーナ」の月です。これは、布施の心から日本の福祉活動の草分けとなり、奉仕活動に尽くされた本願寺のお姫様であり有名な歌人だった九条武子様の祥月がご縁となっています。

仏教語「ダーナ」は「旦那」の語源でもあります。「布施・施し」の意味で、仏法を広めるために僧や施設を支えて下さる人を言いましたが、今ではお説教で布施を口にすれば、すぐ金銭的な寄付を連想されるようであらゆる宗教に共通した大切なこの行為や生き方を説くことに躊躇してしまいます。しかし、本来の布施の実践は、誰にでもできるものであり、する側とされる側の双方が温かく穏やかな心になれる仏道なのです。

* * *

仏教には、真実の仏法を伝え広める＝法施（ほうせ）、金品を分かち合う＝財施（ざいせ）、恐れを除き、癒しと勇気を与える＝無畏施（むいせ）、思いやり、支え合う心＝無財の七施（むざいのしちせ）の4つの布施が説かれています。いずれも、いつでも、どこでも、だれでも、自分の出来る範囲で実践できる

仏教徒の生き方の根幹となるものです。

中でも無財の七施は、

- 1、眼施（がんせ）＝あたたかいまなざし。
 - 2、和顔悦色施（わけんえつじきせ）＝にこやかな表情。
 - 3、言辞施（ごんじせ）＝やさしい言葉。
 - 4、身施（しんせ）＝精一杯のおこない。
 - 5、心施（しんせ）＝慈しみ深いこころ。
 - 6、床座施（しょうざせ）＝人にあたたかい席を。
 - 7、房舎施（ぼうしゃせ）＝気持ちよく迎えるところがけ。
- の7つで、これを知っただけで心が温かくなることでしょう。それが布施のもつ徳、大きなはたらきなのです。

しかし、一般に布施をすれば、金銭や食べ物を施すことを思い、恩着せがましい気持ちで施してはよくないと分かっているながら、「してあげた」、「させられた」、という思いになりがちなのではないでしょうか。どんなかたちの布施であれせつかくの施しなのです。それが真の布施となるには、施した側が感謝の気持ちをもつことだと説かれています。「受け取っていただいてありがとう」という気持ちで施さないと真の布施ではないのです。それは口に

出しているものではなく、あくまでそういう心になれてこそ、仏教的な真の布施になるのです。

* * *

昨今、「お経料」「何々料」というように提示された方が良心的で明朗だという声が聞かれますが、それでは真の布施の心が育まれていかず、教えから遠く逸脱していくものです。それでも、施された側は、それがいかなる気持ちからのものであっても、また何であっても、受け取って無駄にせず役立たせ、布施として成り立たせていかなければならないと教えられています。

また、施しをすることだけが布施と思いがちですが、道元禅師の教えには、私たちがもっている、欲しい、欲しいといった貪欲の心を抑えるのが真の布施であるとあります。誰にでもできるものが布施ならば、一番先にできる布施は、むやみに欲しがらない、貪らない心で生きることだと言えるのでしょうか。

そして、目に見える施しだけではなく、多くの施しの中に生かされているのだという気づきをもたらせてくれるみ教えを聞くことも大切な布施です。お念仏に生きる日暮しのなかに、自ずと与えられたものを大切に生かすという布施の心、行いが育まれていくことでしょう。

合掌

奏庵初法座

日時
2月26日(木)
午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

法話

龍谷大学大学院教授

早島理師

ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとき

水仙や寒紅梅も満開を過ぎ、日増しに長くなる陽に春近しを感じます。

季節を先取りする文化は、時に私たちに追い立てますが、にわかに騒がれるようになった習慣とは違って、日本人に即した無理なく恥ずかしくなく振る舞えるものです。月々の奏庵法座も皆さまの暮らしの中に自然にあるものになって伝わっていくことを願っています。

今月はお馴染みになりました早島理師がお話下さいます。どうぞ楽しみにご参り下さい。



奏庵バス旅行へのお誘い

《親鸞聖人・関東伝道800年・北関東のご旧跡と那須温泉》

久しぶりの親睦旅行を、親鸞聖人・関東伝道800年に因んで計画しました。最終決定ではありませんが、下記のように誰にも楽に楽しんでいただけるバス旅行です。皆さまのご参加をお待ちしています。

《旅行期日》

①5月27日(水)28日(木)

②6月18日(木)19日(金)

のどちらか

《募集人数》15名まで

《宿泊予定》

ホテルエビナール那須

《参加費》¥39,000 -

【1日目】

7:30 逗子駅前出発～横々・首都高・東北道＝佐野真岡IC～10:30 結城・親鸞聖人ご旧跡称名寺参拝～12:00(昼食)～1:30 問屋街・見世蔵散策～16:00 宇都宮～東北道～那須IC～南ヶ丘牧場～那須温泉泊

【2日目】

9:00 ホテル出発～10:00 殺生石(九尾の狐伝説の地)・那須ロープウェイ(茶臼岳の新緑を味わう)～12:30 チーズガーデン五峰館(昼食)～お菓子の城(お買い物)～那須IC～東北道/羽生PA(鬼平江戸処にて休憩)～16:00 首都高・横々道～19:00 逗子着、解散

* 参加ご希望の方は、奏庵(046-871-1863)までお電話にてお申し込み下さい。

《スーツケースに入れられた紙おむつをした老女の遺体が発見されたというニュースが流れたとたん、家族全員がいっせいに自分を見た》と認知症の母と暮らす甥がフェイスブックに載せていた。■世話をしてくれる妻や手を貸してくれる子供達に窘められながらも、認知症の母親には詮ないことを言わずにおれない親子というものの因果さを見るのは可笑しくも切ない。姉がデイサービスと折々のショートステイを利用しながら、築いてきた家に家族と暮らせていること、何よりと感謝こそすれ不服ひとつないが、予備軍としての明日の我が身が重なってしまう。■病弱の夫、自らの大病、甥自身も若くして癌になり心痛をかけ、檀家参りや本堂の再建など苦勞が多かった人生を、明るくおしゃべりに、何よりご法義をよるこんで生きてきた母親のよき時代を知る人が亡くなっていくのを嘆くのは、母親の人格を守ることが益々できなくなっていくという思いからだろう。■あの老女を捨てたのは娘だったと判明したが、その親子にはどんな暮らしがあったのだろうか。たとえ、どのような理由があったとしても、肉親の遺体を捨てる方、捨てられる方、どちらも悲しい。■最近では遺族の少ない葬儀がほとんどだが、本来葬儀にはこうでなければならないというものはなく、これは時代が生んだ当然の結果で何ら恥じる必要のない葬儀だ。どんな死、どんな葬儀にも尊厳をもって接すべきで、世論の作った孤独死、家族葬、直葬という言葉で括って負のイメージばかりを助長させるのは、かえってそういう人たちを孤立させ、一種の差別ではないかと思う。■「独生独死独去独来」の教えの通り、中には娘さんがひとりで葬儀を出されることもあるが、そこにも楽しかった家族の歴史と、看病や介護も経て、縁ある者の勤めを果たし終えた安堵と清々しさがある。■人間は唯一弔いをする生物だったはず。死は単なる生命の終わりではない。人間なればこそ死を信仰で迎え入れ乗り越えて生きてきたことを教えられていない人がふえている。 Norimaru